若越郷土研究

44の4

国の特別史跡一乗谷出現の秘話

松原信之

一、

昨年の平成九年度は、一乗谷において本格的な発掘調査が始められて丁度三十年目、また、一乗谷が国の特別史跡に指定されて二十五年目という記念すべき節目の年に当たり、昨年は各所でイベントが催されて県民の関心を集めた。今や一乗谷は、福井市の福井県のというよりは、日本の最も代表的な中世戦国期の画期的な遺構史跡として著名となり、戦国史研究家はもちろん、一般歴史愛好家にも好評となり、毎年多くの見学者をこの一乗谷へ引き付けるようになった。

私がはじめて一乗谷と朝倉氏に関心を寄せるようになったのは、大学を卒業して福井県立高志高等学校に奉職した昭和三十年の前半頃からであった。高志高校の校区でもあった一乗谷の近辺からは多くの生徒が通学していたことから、一乗谷を野外学習の場として社会科研究クラブを結成し、その顧問となってからは、毎年何回となく生徒を引率して自転車で調査に訪れたものであった。そして、高志高校の文化祭には毎年、一乗谷をテーマとする展示を続けてきた。しかし、当時の一乗谷は訪れる人も少なく寂寞とした山合いの寒村にすぎず、ただ、谷合いの方々には石仏群が散在し、水草の生い茂げる堀跡や崩れた土塁と庭石が遺跡の土中からは僅かに顔を出しているだけで、今の一乗谷の盛況は想像だにできなかった。

私の朝倉氏研究は丁度この頃から始まった。そして、生徒の現地調査指導を通じてお世話になったのが、城戸内の青山作太郎氏と東新町の西田保氏であった。特に一乗谷遺跡の重要性を強く認識し独自の研究をしていた西田保氏とは深い親交を続けていた。昭和四十二年四月に私は県立丸岡高校に転勤したが、ここでも当校の社会科研究クラブの生徒と一乗谷遺跡の調査を続け、これと並行して朝倉氏の研究にも没頭した。

二、

ところが、昭和四十五年六月頃から農業構造改善事業の一環として一乗谷にも組合が組織され、土地改良事業が進行し始めた。そして、七月の夏休みに入ったある夜、東新町の西田保氏から突然電話が入った。西田保氏所有地にブルドーザーが入って掘り返したところ貴重な遺物が続々と出土したということであった。翌日早速、西田保氏宅へ駆け付け目にして驚いたのは、座敷一杯に溢れた、無数の青磁・白磁・染付けなどの陶器の破片、石製のあんか（コタツ）や茶臼等々、発掘された遺物であった。特に興味を惹いたのは一部に金箔を残す阿弥陀如来の石仏で、素人の目にも実に貴重な遺物として映った。このままだと遺跡はどんどん破壊されていく。そんなことを考えると頭の中が真っ白となったことを今も覚えている。

そこで、西田氏と一致した意見は、福井県と交渉して土地改良事業を一時的でもストップさせ、とにかくも遺跡の破壊をまずくいとめ緊急調査を求めなければならないということであった。しかし、当時は高教組と県教委とは激しく対立していたから、高等学校教員や福井大学教育学部教授などの県と利害関係をもつ我々では、福井県当局との交渉は不可能と感じていた。そこで閃いたのが、当時、私が寺院史や一向一揆も研究していた関係から、陰に陽に御指導を受けていた金沢大学の井上鋭夫助教授に相談してみることであった。早速研究室に電話したが、先生は当初、「一乗谷から遺物が出るのは至極当然のことだ」として、あまり気乗りがしない様子であった。しかし、夏休みに入ったことでもあり、学生を連れて見学に行こうという返事であった。

七月末に来福された井上助教授も最初は平然としておられたが、西田氏宅へ案内して遺物を目にしたとたん顔色がさっと変わった。想像を絶した遺物であったからであろう。その時もまだ、戸外の上城戸内側ではブルドーザーがうなりを上げて遺跡を掘り返していたから、このまま放置しておいたら、遺跡はすべて破壊されてしまう。事態は切迫していた。そこで少なくとも緊急調査だけでも強行してもらうためには土地改良事業を一時延期してもらわなければならない。そこで福井県に強く働きかけるためには、マスコミ関係者とも共同戦線を張る必要があった。そこで、浮上したのが歴史に深い関心を有した福井新聞社の青園謙三郎氏であった。当時、井上先生は青園氏を知ってはおられたが、それほど親しい間柄ではなかったらしい。しかし、とにかく井上先生から電話で賛同を得ることになった。

三、

ようやく準備が整った八月三日に知事交渉を決行することに決まった。当日、中川知事は不在だが、須知副知事が応対するとのことで、私も井上先生と青園氏に同行して福井県庁に向かったが、若輩だった私はどうしても副知事室に入ることはできなかった。室外で気を揉みながら室内を窺っていたが、時々声高の井上先生の声だけが響いた。ひとしきりして井上先生らが室から出てこられた。県側は当初なかなか理解を示してくれなかったが、ようやく「善処する」との回答を得たので引き揚げたとのことであった。翌日、須知副知事の一乗谷現地視察も実現すると、今度は文化庁の友人へも手を回しておかなければならないと云っておられたが、一方、私には「これから、いよいよ一乗谷の遺跡発掘が始まるが、これまでの古代の発掘とは異なり中世遺跡の発掘調査には、文献調査の研究が重要となり、これまで続けてきた朝倉氏の研究を一層、発展させるように」との提言であった。このことが、その後の私の本格的な朝倉氏研究への大きな契機となった。

八月末には文化庁の調査官も訪れ全国的にも貴重な戦国期遺跡として遺跡の調査保存を強く勧告したが、当初、地元では土地改良か遺跡保存かで意見が大きく分かれた。当時、一乗谷はまだ足羽郡足羽町に属していたが、遺跡の調査や保存のための予算は国半分、県二割に対し、財政難の足羽町には三割負担が義務づけられていたので、地元足羽町の行政側も難色を示した。このように一乗谷の遺跡保存については地元では必ずしも順調に進ま

ず、また、この問題の直接の契機となった西田保氏までが地元では白眼視されることもしばしばだったと、時折り西田氏が私にこぼしておられたのを思い出される。

しかし、この問題が一決しないうちに、その年の十二月十一日、一乗谷のうち城戸内の全域と隣接する東新町の安養寺跡・御所跡を含めた総面積は二七八ヘクタールの広大な区域が一挙に国の「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡」として指定された。そして、翌四十六年九月一日、足羽町が福井市に編入されると、遺跡保存の財政的な負担は福井市に移管され、やがて、指定された遺跡のうち、破壊が危ぶまれる城戸内の田畑の大部分が福井市によって一括して買収されることとなった。

四、

かっての寒村一乗谷も、現在は年間何十万人もの遺跡見学者の訪れる一大観光地に変身してしまったが、まさに国・県・市の三者が一体となった遺跡保存が功を奏したというべきであろう。しかし、このことは遺跡の保存のためにその大部分を福井市が一括買収したことにより、この一括買収を可能にした地元一乗谷の城戸内の住民の決断と協力があってのことこそ忘れてはいけない。そして、井上氏・青園氏・西田氏ら、その時の保存運動の戦士のほとんどが、今は故人となられ、時の流れの早さに感無量の想いがする。過日、この経緯を何人かにお話したところ、これを長く記録にとどめるべきだとの強い提議をいただいたので、保存運動に努力された戦士の冥福を心より祈って、ここに一筆をふるった次第である。

一九九八年八月記